



メイド喫茶 連続殺人事件

「ここで働かせてください！」

「ダメだ。君、男だろう」

店長は無精髭を撫でながら目をしかませていた。探偵が女装して現場に潜入し、事件の捜査をするのは昔からある定番のパターンではないのか。それさえさせてくれればこんな連続殺人事件などあっという間に解決するというのに、なんとまあ頭の堅い店長である。

「君のことは知ってるよ。いままで数多くの難事件を解決してきた噂の名探偵さんだ。だがな、男がこの店で働いているのがばれるといろいろマズいんだよ」

「すでに殺人が2件も起きている時点で世間的には十分マズいですよ。一刻も早く解決するためにそういう捜査を行って内部の人間関係を探るのが一番いいと提案しているんです」

「だって君、男だろ？ まあたしかに、メイド服が入りそうな体型ではあるけれども。スパイとしてでも雇うわけにはいかないな。お客様との信頼を崩すことになってしまう」

タバコを灰皿に押しつけながら店長は嘯いた。ここの従業員であるメイドさんが2人も死んでいる割には余裕のある態度だなと俺は思った。本当に事件を解決したい気持ちはあるのだろうか。

「絶対にうまく行きます。いかなる粗相もいたしません。こういう捜査方法は一番得意なんです」

俺は野蒜二郎、名探偵だ。名探偵にも趣味の一つくらいある。彼女の岩槻綿子に唆されたのか、自分から始めたのかは覚えていないが、女装は大の得意なのである。メイド喫茶の店長から捜査の依頼が舞い込んできたとき、俺は女装して捜査ができると舞い上がって思わずamazonでメイド喫茶トロピカルのファンシーでフリフリなコスチューム一式を注文してしまったのだ。明日早速届くはずである。それなのに、こうして出鼻をくじかれてしまったのだ。最悪である。

「とにかく、そういう捜査はやめてくれ。ほかにもメイドみんなに話を聞くとか、ほかの形での支援ならいくらでもやるよ。またいつか犠牲者がでるかと思うと不安でしょうがない。ただ、この店の名声を汚したくはないんだ。どうか理解してほしい」

「この店のメイドのまねごとなら完璧にこなしますよ、なんなら今から実演してみます？」

「もういいだろ」

店長は灰皿でテーブルをおもいきり叩いた。ただでさえゴミっぽいメイド喫茶の控え室に灰が舞い上がってハウスダストと共に輝いている。俺は報酬の前金を無言で数えて受け取るとその場から立ち去った。

「お帰りなさいませ、ご主人様！」

さまざまな装飾で意匠を凝らした店内には嬌声が響いていた。秋葉原で今や五本の指に入ると言われているメイド喫茶である。俺もそこで働くことができる絶好のチャンスだというのに、一気に事件を解決する気が失せてしまった。メイドたちの声がお帰りくださいませに聞こえてくる。もうなんか、適当な人間を犯人に仕立ててさっさと身を引こうかしら。エレベーターの鏡に写った自分の憂鬱な表情を眺めつつ扉を閉めようとしたら、直前でここの店員らしき人物が駆け込んできた。

「待って、探偵さんでしょ？」

黒髪のツインテールにくりつとした円らな瞳。ジャンパーを着込んでいるがおそらく仕事の帰

りなのだろう。それはこの店一番人気を誇るメイドさんだった。

「初めまして、山吹るかともうします。店では”るかにゃん”って呼ばれてます」

雑居ビルの中央をエレベーターの轟音が下へ下へと貫いていく。機械の軋む音も耳に入らないほど、そのメイドさんは可憐だった。俺は慌ててエレベーターのボタンに目をそらした。

「店長に呼ばれたんですよね、あのことで……」

「ああ」

そっけない返事しかできない自分が恨めしかった。

「そのことなんですけど、いろいろ話したいことがあるんです。ちょっとつき合ってもらえませんか？ 私、たった今シフトが終わったばかりなので」

俺はあっという間に事件解決へのモチベーションを取り戻した。女装はするけれども根は単純な男なのだろう。

「メイド喫茶トロピカル連続殺人事件。2件ともまったく同じ、早朝に店長がメイドさんの死体を発見したパターン。事件発覚当初、現場は密室で最初に店長が鍵をあけて死体を発見し、ただちに警察へ通報したとのこと。死体は司法解剖にまわしている途中なので、はっきりとした死因はまだわかっていないものの、二人とも胸に刃物を刺された形跡があり、現場には血が流れていた」

「でも、刺殺が直接の原因ではないっていうのですね」

「そう。血の広がり方がちょっとおかしいんだ。血の広がり方や凝固の仕方から推測するに、おそらく死後ちょっとしてから何かのカモフラージュのために刃物を死体に刺したと考えられるんだ。これは死んだ二人とも全く同じ。死因は本当に不明なのだけど、まあ同一犯とみて間違いはないだろうな」

中央通りから路地に入ったところにあるイナックスカフェという店で俺は山吹るかど事件について語り合っていた。ちょっとは探偵風を吹かせようと思って真面目に語っている。

「亡くなったのは本当にベテランの二人だったんですよね。私がここに入る前からずっとやってきていて、かなり仕事も多かったみたいです。その日もたぶんたまたま早朝に出勤していたんでしょう」

「なにかメイドどうしの間で今回の件について噂ある？」

「うーん、どうかしら。みんな他人にはあまり関心がないのかなあ、実はあまり話題にも上ってないですよ。口には出さないものの、次は私の番じゃないのかしらってみんな恐れているのかもしれないですし」

山崎るかはカフェオレを飲みながら早口でまくしたてた。けっこうさばさばとした性格なのかもしれない。

「殺された二人を誰かが憎んでいたようなことは？」

「特にはないんですよ。二人とも一生懸命働く娘でしたし。店長と仲が良かったかどうかはわかりませんが」

「店長と不仲だった？」

俺の質問に一瞬、山崎るかは手を止めてカップを皿の上にゆっくり置いた。そして言葉を選びながら答えた。

「仲がいいっていう話は聞きません。でも、店長があの人を殺したいほど憎んでいたっていうことは絶対ないでしょう。あの人二人はメイド喫茶トロピカルにかなり貢献してましたから、彼女らが抜けるのは店長にとってはダメージだとは思いますが」

「なるほどねえ。いや、密室殺人事件の第一発見者は両方店長なんだ。店長が直接殺害していたとすれば、別に密室殺人の謎を説く必要はなくなってくるからね。なんの変哲もない事件に成り下がる」

「でも、店長自らが捜査の依頼をあなたに頼んだんですよ？ あなたは新聞でも有名な名探偵です、もしも店長が犯人だったとしたらわざわざ自分の首を締めるようなことはしないはずですよ」

「それはいろんなパターンがあるからなんとも言えないなあ」

山吹るかは愛らしいだけでなく頭のキレるメイドさんだった。俺の彼女も相当悪知恵が働くけ

れども、山吹るかにもその素質はあるかもしれない。

「私から伝えられる情報としては、今の店長は従業員にはあまり評判が良くないってことです。店の仕事をあんまりしないのに、偉そうに構えているんですよね。メイド喫茶の企画なんかもメイドに任せてますし、私が入ってからは新人の採用も指導も私に投げっぱなしです。だからといって、殺人が2件も発生するのは解せないことなのですからけれども……」

「頭が堅いんだよなあ」

「それもありますね」

俺は女装して捜査する提案を踏みにじられた話を山吹るかに話した。女装という趣味を披瀝するのは気持ち悪がられる可能性もあったけれども、山吹るかならきっと理解してくれるだろうと踏んで陶々と語ってやった。山吹るかは笑いながら俺の話聞いてくれた。

「女装して探偵するんですか！ それは傑作ですね！」

「別に不思議なことでもないよ、事件解決のためならなんでもやる」

「ひょっとして、女装がしたいだけなんじゃないですかー？」

凶星だった。俺は不味いイナックスコーヒーを飲み干した。真新しい便器の香りがする。

「とにかく、もうちょっと別方面からアプローチしてみるしかないな、雇ってもらえないなら」

「名探偵さん、さっきの私の話聞いてました？」

「えっ？」

山吹るかはニコッと笑顔を見せた。営業スマイルなのか地の表情なのかわからない。

「メイド喫茶トロピカルの採用は私がやってるんです、店長から権限をもらってるんですよ。まさか名探偵さん、今さっき店長に女装姿を披露してないでしょうね？」

俺は思わず立ち上がった。

「とりあえずこれ前金ですね。正式に働きはじめたら銀行振込にもできますけどどうします？」

山吹るかはそう言うと自分の財布から適当にお札を数枚取り出して俺に渡してきた。

「契約成立ねっ」

俺は肯かざるを得なかった。

自宅に帰ると彼女が合鍵を使って僕の部屋に侵入していた。

「また変なの買っちゃってー」

そう言って綿子はメイド喫茶トロピカルの衣服を着たままamazonの段ボールに油性マジックで「おれがガンダムだ」と落書きしていた。

やれやれ。

「おい、なんで勝手に開封してるんだよ」

「え、これ私へのプレゼントじゃないの？ ほら、今日誕生日だし」

やばい、すっかり忘れていた。

「悪い、それは密室事件を解決するためにどうしても必要なものなんだ。ご希望なら事件解決後に差し上げるから、ちょっと貸してくれ」

「なによそれー。どうせ私の誕生日も忘れてるんでしょ。お父さんに二郎くんの悪事をいろいろばらしちゃうわよ」

こいつの父親は警察である。この謎のコネが事件の解決に役だったり、逆に混迷したりといういろいろあったのだ。

「悪い。すまんかった。明日絶対何か買ってくるからさ。あ、なんなら明日メイド喫茶トロピカルにおいでよ。従業員一同で誕生日をお祝いするからさ。ハッピーバースデートゥーユー」

「いやよそんな恥ずかしいの。あんたはオムライスにケチャップでダイイングメッセージでも描いてなさいよ」

そうだ、あれを練習しておかなければ。明日から早速勤務なのに。

「ちょっとケチャップ買ってくる」

「なによそれ！」

ガンダムが俺の頭にクリティカルヒットした。

「そんなもんより私へのプレゼント買ってきてよ！ あんた本当に探偵なの？」

「あーわかったよ、買ってくるよ」

「この間みたいにしまむら妖夢服買ってこないでよ」

「わかってるって」

俺は自宅から一目散に逃げ出した。

いつの間にこんなヒステリー女になっていたというんだ。出会った頃はとても純情で、俺の変な性癖にも理解を示してくれてとてもいい彼女だったのに。ここしばらく我慢して、事件をあっさり解決したら山吹るかに乗り換えようかなあと俺は密かに計画を練っていた。

メイド喫茶の朝は早い。綿子からようやく奪い取ったメイド喫茶トロピカルのコスチュームを着用し、化粧をあしらい、すっかり別人になった俺は山吹るかの紹介とともに自信満々に店長へ挨拶した。まさか昨日の探偵だとは夢にも思っていないだろう。こればかりは絶対的な自信があった。

しかし仕事の方は想像以上にしんどいものであった。次から次へと注文が舞い込んでくるし、なぜか客とともにポラロイドカメラで撮影することになるし、即興でハレ晴れユカイを踊らされるなんてこともあった。昼の休憩に入ったときにはすっかり体が疲弊しており、まかないで提供されたオムライスにでっかく「神は死んだ」とケチャップで描いて独りむなしく食していた。

トロピカル店内にシャンシャン♪とファンシーな曲が流れ始めるとそれがじゃんけんイベント始まりの合図である。空席さえあれば常時客を店内に招いて座らせるものの、このときばかりは新規の入場が完全に禁止となる。密室殺人と聞いてメイド喫茶に内側からかかる鍵なんてあるのかと疑問に思ったが、どうやらこのイベントのために作ってあるらしい。外の待合席にはイベント中しばらくお待ちくださいと看板がかかっており、イベント中の店内はいわゆる密室状態と化すのである。

「はいみんな、準備はいいかなあ？ 萌え萌えじゃんけんはじまるよー！」

自分でも言ってよくわからないことを半ばやけ気味になって叫ぶと客も乗ってくる。見ていてとても面白いのは、何の恥じらいもなくノリノリでついてくる常連客みたいな連中と、本当に恥ずかしそうなそぶりをして声も小さくなっている組に分かれることだ。特に後者は見ていて面白い。店に入ってくるだけで顔を赤らめている人もいるし、お手拭を渡すだけで口ごもってしまい、メニューの発音もなんだかおかしい。おそらくメイド喫茶に初めてくるような客層なのであろう。下手な演技をしつつひたすら配膳の仕事をするのはかなり骨の折れる作業であるが、一人一人の客を見ながらやっていると結構面白みがあった。

「ルールを説明するよー。るかにゃんとじゃんけんをして、勝った人は手を上げ続けてね。負けたご主人様と、あいこになったご主人様はそのまま手をさげてくださいね！ ズルはなしだよ！」

山吹るか、さすが手馴れている。相変わらず店内にはよくわからない曲が流れており、客の一部が狂気に満ちた表情で体を左右に揺らせていた。非日常を提供する空間を日常的に生きていると特殊な精神状態にならざるを得ない。探偵も大変だが、この仕事も結構大変だ。

「じゃんけーんぽーん！」

最終的にメイド喫茶初来店という客が優勝し、メイド全員と写真を撮って粗品を絵に描いたような粗品をもらって自分の席へと帰っていった。そいつの友人がずっと笑いながら囁し立てている。イベントも終わり、入口の鍵を開けると店内滞在時間を過ぎて会計に回る客でレジが混雑した。俺はひとりずつ会釈しながら客がずらかるのを眺めるとテーブルに残されたコップ類と鶴っぽく折られた紙ナプキンを店の奥へと回送する仕事を続けた。

厨房にはひとつ窓があり、そこをあけると秋葉原の路地裏が眼下に見下ろせる。俺はそこから顔をひよこっと出し、避難が可能かどうか考えてみた。

「この下の階は24時間営業の男性用サウナなんですよね」

山吹るかが答えた。

「殺害後、ここから逃げ出してなにごともなく生還できそうなのはうちのメンバーだと店長くらいですね。女の子にはそもそも脱出して柱をつたいながら下に下りるのが難しいし、仮に降りれたとしても4階の男性用サウナで引っかかるから女の子には難しいですね」

「店長は別に第一発見者だから無理して脱出する必要なさそうだしなあ。この窓はあまり意味なさそうだな」

「さすが探偵さん、結構まじめに捜査するんですね」

「そりゃあそうだよ」

「女装したいだけじゃないんですね」

山吹るかはそう言って笑った。ほかのメイドさんも厨房にちらほら出入りしていたので、そんなことを言ったらまずいんじゃないかと俺は少しあせったけれども、みんな何食わぬ顔で作業をこなしており、我々の話を聞いていないようだった。

「ほかには脱出経路なさそうだなあ。店長が犯人という場合を除いて、もう完全な密室状態ということになってしまう。そして店長が稼ぎ頭のメイドを次々と殺害するのは非常に考えにくい。これは結構厄介な謎になってきたぞ」

「仕事の方も忘れないようにね」

山吹るかは伝票を渡しながらそう言った。趣味と仕事の両立は大変である。

「あ”～疲れた」

風呂からあがってメイドさんのイラストが入ってるビールを一杯ひっかけると綿子がおっさんくさいと嘯いた。誕生日プレゼントとして買い与えた能美クドリャフカの衣装を見事に着こなしている。

「なんか仕事が忙しすぎて全然仕事進まないのな」

「言ってることおかしいよ。どうせかわいいメイドさんといちやいちやしてきたんでしょ？」

「そんな暇ないから」

探偵なんていい商売である。事件現場に言って自分の思ったことをペラペラと喋るだけで金になるのだから。まあ、他の探偵はもうちょっと苦労しているかもしれないが、俺は名探偵だから関係のないことだ。少なくともメイド喫茶のバイトよりは楽である。

「萌え萌えじゃんけーんってやってきたんでしょ？ 今度私にもやってよね」

「綿子そういうの好きなのか」

「当たり前でしょー。何年間女装少年の彼女を務めていると思ってるのよ。メイド喫茶くらい詳しくて当然じゃない」

なんだか論理がおかしい気がしたが深くほじくるのはやめにした。エネルギーを浪費するのはよそう。

「最近、二郎くんが出入りしているメイド喫茶って、メイド喫茶トロピカルだよな？」

「ああ。どうしたいきなり」

「ちょっと、ね」

「なにさ」

「ちょっと特殊なメイド喫茶なんだよね、っていうこと」

メイド喫茶に精通しているわけではないが、とくに変なところもなくいたってふつうのメイド喫茶だとは思っていたけれども。

「急にどうした？」

「メイド喫茶ってだいたい経営母体があるのよ。違うように見えるメイド喫茶であってもだいたいはチェーン店。一つの経営母体が意匠を凝らして様々な客層をつかむために独自の個性を放った店舗を形作っていくのよ」

でっかいボタンのような帽子をくいっと整えながら綿子は言った。さすが警察官の娘である。俺の知らないところでいろいろ調べているのだ。

「なるほど。で、トロピカルは？」

「あそこは経営母体がないの。完全オリジナル。どのような経緯をもって出現したのか定かじゃない。いつの間にか、秋葉原にひょこっと登場していた」

「別にふつうのメイド喫茶だったと思うけどなあ」

「それが怪しいんじゃないの。きっと何かあるわよ、あそこ」

「そうかなあ」

「二人死んでる時点で怪しいと思わないの？」

「そりゃあそうだけど、俺のいくところ殺人ばっかり起こるからそれは別に異常だとは思えな

いな」

「今までの殺人事件、全部二郎くんが犯人なんじゃないの？ 金儲けのために適当な犯人を仕立てて事件をでっちあげた」

「それは斬新な推理だな」

「あなたの推理ほどじゃないわよ」

白いマントを翻して綿子は部屋の片隅に座り込んだ。

「わふー」

「やっぱりミルキィホームズの衣装がよかったかなあ」

「じゃあ次のクリスマスはそれね。決まり！」

「もう俺の代わりにメイド喫茶で働いちゃいなよ」

「それじゃあ二郎くんの捜査にならないじゃないの」

「そうなんだよなあ……」

俺は明日の激務に備えて早めに寝ることにした。

翌朝、何気なく出勤するとめでたくその日はメイドの慌ただしい仕事から解放されることになった。俺はすっかり肩をなで下ろし、ガーターベルトを少し緩めてほっとため息をついた。安堵感に包まれてこのメイド喫茶から第三の死者が出た事実をあやうくぶん投げたまま家に帰るところだった。

いままでとまったく同じパターン、早朝に出勤してきた店長が部屋の内側から鍵がかかっているのを確認し、店長しか持っていないというマスターキーを使ってドアを開けるとメイド服をまとった美少女が部屋の中央で倒れていたのだ。胸には厨房で使っていたナイフ。ただし血の拡散具合が異様に少ない。今度もカモフラージュかなにかのために後から刺したのかもしれない。死因は不明だ。

「店長、発見当時室内には誰もいませんでしたね？」

「ああ、それは間違いない。いきなり逃げ出した奴もおらんよ」

「どこかに犯人が隠れてないか探してみます」

さて、かくれんぼの開始である。俺はメイド喫茶トロピカルの人が隠れられそうな場所をくまなく探して回った。警察が来る前に一通り見ておかないとまた面倒なことになる。綿子の父親である岩槻警部は正直役立たずだ。自分で事件を解決してしまった方が手っ取り早い。

「誰もいないみたいですね」

「いるわけないさ」

「またもや密室殺人事件というわけですか」

もっとも、いつも開けっ放しであるキッチンの窓は開いていたけれども、前述したようにここからの脱出は犯人であろうメイドさんの誰かには難しいものがある。ひょっとして外部犯の仕業だろうか。たとえばここに入出入りしている常連客の誰かが特定のメイドたちに殺意を抱いていて、こういう事件を起こしているのだろうか。

しかし、早朝のこんな時間にメイドを客が呼び出すのも不思議な話である。一人くらいであれば逢引のように呼び出して殺害することはできるかもしれないけど、何が何でも三人のメイドを呼び出して殺害する常連客はいるのだろうか。これはもうちょっとメイド喫茶で働いて常連客の様子も調べてみるしかなさそうである。

「これで三人目だ。いったいどうなってるんだ」

「殺されたメイドになにか共通点はありますか？」

「特になさそうだなあ。みんな発足時からしっかり働いていた女の子だよ。一人目がまりあちゃん、二人目がしずくちゃん、三人目がありすちゃん。それぞれ本名は木和田麻里、雫石滯子、そして有栖川恵子」

ふと立ち止まって、店長は俺の方を振り向いた。

「そういえば、どうしてまだ捜査の依頼をしたわけではないのに名探偵さんこんなに早くくるんだ？」

「えっ……」

やばい。まさかここで隠れて働いてましたとも言えないし、カバンの中に入っているメイド服を見られたらアウトである。

「ほ、ほら。事件の香りがしたんですよ」

「何かねそれは」

「名探偵の直観です。昔から探偵の現れるところに事件が起きるって相場が決まっているんですよ」

「それって探偵が事件を起こしているんじゃないだろうなあ……」

まあ、探偵と犯人は紙一重とは良く言うけれども。

ほどなくして警察が現れた。例の岩槻警部である。会話に詰まっていたのでなんだか助かった。

「またお前かよ！」

岩槻警部は事件現場で俺を見るなりそう叫んだ。

「こちらの店長から事件の捜査依頼を受けている野蒜二郎と申します、以後お見知りおきを」

「お前のことは重々承知しているさ。さあ、早く事件を解決して帰ってくれ」

ものすごい言いぐさである。

「岩槻のおっさんよ、これは密室殺人事件なんだ」

俺は事件の概要を警部に説明した。

「なるほどな。でも、犯人が男なら脱出は可能といえば可能なんだろう？」

「難しいけれどもなんとかなる。だから常連客の外部犯という可能性も……」

……いや、待てよ。

「やっぱり男の外部犯説は難しい。なぜなら密室殺人にはこのメイド喫茶の構造を熟知していないといけないからだ。そもそも、厨房に入ったことのある人ではなければこの窓の存在、そしてそれが常時開け放しであるということを知らないだろう。もしも犯人が窓から脱出したという方法が適用されるならメイドさんによる犯行は不可能になるし、外部犯ならここから脱出する方法を使えない。つまり、店長が犯人であるという場合を除いて不可能犯罪なんだ。完全な密室だよ、岩槻のおっさん」

「じゃあなんとか解決してくれよ」

「それが警察の言うことかよ」

「事件が解決すればなんでもいいんだよ、警察っていうのはよ」

「そんな脳天気なのは岩槻のおっさんくらいだろ」

「知らんわ。今のところ犯行できるのは店長くらいなんだな。それじゃあそいつが犯人じゃないのか」

「そんな簡単なわけないだろ」

「だって店長以外の犯行は不可能だってさっきお前言ったじゃないか。それを鵜呑みにすればまがいもなく店長が犯人だ。そういうわけさ」

「まってくれおっさん、これには罠がある。第一、今回の事件で依頼人は店長本人なんだ。まさか自分の首を締めるようなことをして探偵はまぬかないだろう。第二に、店長はメイドを三人も殺害する動機がない。別に嫌っていたわけでもなく、むしろ店の看板として創業当初から働き、店長もずいぶん気に入っていたメイドを三人も殺害するはずがない。ただでさえ三人も抜けたらファンが店から離れていくだろうに、ましてや殺人事件だったら誰も怖くて近づけなくなる

だろ。そんな店長人生を賭けてまで殺したいメイドがいたというのはあまり考えにくいんだ」
「動機はとっ捕まえてから聴くことにするぜ。とりあえず店長を事情聴取したい。暑までご同行願うことにしよう」

そう言って俺のアドバイスを聴くことなしに岩槻警部は店長をその場から拉致していった。俺はなんだかいたたまれない気分になった。

店長が警察に行ってしまうとこの店にどんな変化が訪れたか。特になにもかわらないというのがその答えである。店の実権はもはや山吹るかが握っており、店長は椅子に座っていたとしてもなにもしていなかったというのが実状だったからだ。俺は大変な仕事からいつ逃げ出すか隙を伺っていたが、まだもうちょっと調べたいこともあり、簡単に辞めてしまうのも問題なので、しばらくこの給仕業を続けることにした。仕事は忙しいけれども、人前で堂々と女装できるのは格別な快感がある。

しかし自信满满だった俺の女装も脅かされる時がやってきた。

「ご注文はアイスティーとオムライスですね。オムライスの方、ケチャップでなんとお描きしましょうか？」

「えーっと、韓国の地図記号で郵便局をお願い」

黒服の女性はそう呟いた。髪はストレートの黒で長く、首から十字架のペンダントを下げている。少しばかり不健康そうな痩せ方をしていた。綿子くらいがっついて食べないとだめである。

「えーご主人様、その韓国の地図記号というのはですね、えーっと……」

「まあ、あなたに描けないのはわかっていたわよ。女じゃないから仕方ないか」

えっ。

なに食わぬ顔でタバコをくゆらせる謎の客。たった今、とんでもないことを口にしたみたいだ。

「男の子であるあなたに忠告するわ、早めにこの店から去りなさい。私は元々この店で働いていたの。ある日、突然山吹るかから辞めるように言われた。その頃にはもう人事の権限は山吹るかが握っていたからね。それからこうしてたまにこの店に来て様子を伺っているけれど、かれこれ三人も人が死んだのでしょ。だからあなたがやってきたのね」

わかった。こいつは名探偵野蒜二郎の正体もその捜査方法も知っている。ちょっとくらいマスコミにたずさわっている人であれば俺の趣味が女装だということくらいわかるだろう。その手の事件もいくらか解決してきた。だから、この女には俺の正体がわかってしまったんだ。

「ちょっと話がある。いいかな」

「あら、メイドさんがそんな口調でご主人様に会話するの？ 別にこんな事態だからいいけれども」

「君は店長となにかトラブルを起こしてやめていったのか？」

「そういうわけじゃないわ。ただ、この店に残ったらなんとなく殺されそうな気はしたのよ。ひよっとしたら私も先輩たちの二の舞になっていたかもね」

愛煙家に特徴てきなハスキーボイスでメイド喫茶の客とは思えない会話を続けていた。周囲は熱狂的な盛り上がりを見せていて俺たちが話していることなどまるで気にしていない。

この女、名探偵である俺に何か忠告するためにやってきたのだろうか。きっとそうなのであろう。

「名前、聴いていいか？」

「五百川蒼子。店ではあおたんって呼ばれてたわ。傷口みたいな名前でしょ？ ちゃんと店の名

簿に残っているわよ」

「その名簿なんだが、探しても見つからないんだ。このメイド喫茶、どういうシフトで回してきているのかもいまいちわからないし、とにかくそういった書類が見あたらない」

「つまりはそういうことよ」

蒼子は俺からケチャップを奪い取るとさらっとピカチュウのイラストをオムライスに描き、すぐさまスプーンでそれを口に運んでいった。さすが、プロの業である。書類上で確認はとれないが、どうやらここで働いていたメイドだという証言はおそらくまちがいないだろう。

「あなたも気をつけることね。早めに身をひいたほうがいいかも」

「あいにく簡単には身をひけないんだ。こう見えて、仕事に命かけてるからね」

「そう。それなら、私が言うことはなにもないわ」

無言でオムライスを食べ終わると蒼子は無言で立ち上がり、会計レジへと進んでいった。先輩のメイドが対応する。俺は仕方なくそのあいた皿を厨房へ下げるしかなかった。

それにしても、俺の正体を見破るとはいったい何者なのだろうか。マスコミに精通しているのか、それとも……。

「コスプレはしょせんコスプレでしかないもの。わかる人にはわかっちゃうって。やっぱりほら、人間って見た目より中身じゃない？」

けっこう前に買ったキュアマリンこと来海えりかのコス服を気ながら綿子はそういった。思えば昔は従順な彼女だったのにこの服を買ったあたりから俺にたてつくようになった気がする。綿子が言うのももっともだが、外見が人を変えることも少なからずあるだろう。この服が綿子に一番似合っている気がする。

「綿子がそんなこと言うの珍しいな。どうしたの？」

「悪いけど今回は完全に名探偵さんの面目丸つぶれになっちゃうのよ。女装して忍び込んでいるのもばれちゃうし、実の彼女さんに謎を先に解かれちゃうし」

「どういうことだ？」

「私、わかったの。一連の事件の流れが」

俺はぶったまげてあやうくソファからずり落ちるところだった。

「なに言ってるんだよ綿子」

「謎が解けたのよ」

ポーズを決めながら自信満々に答える綿子。

「犯人は誰だ」

「犯人は店長よ」

「おい綿子。それじゃあ君の父さんとまったく同じじゃないか。なんのひねりもない。たしかに店長は犯行は可能だけど、そんなに簡単に解決する事件じゃなからう。第一、殺害同機はどうするんだ。今頃君の父さんは無実の罪を能なし警部によって着せられてようやく一時的に解放されてるよ。素人とはいえ、名探偵の彼女なんだからもう少し」

綿子はプリキュアが持っている謎の棒みたいなので頭をおもいっきり殴ってきた。良く知らないがマリインタクトと言うらしい。

「いいから話聞いてよ。犯人はたしかに店長だけど、発見当初現場が密室状態だったのは間違いないんだから」

「なんだと？」

「店長がメイドさんをそれぞれ発見したときにはもうすでに彼女たちは死んでいたの」

「それってどういうことだ」

「メイドさんの死因を店長はわからなかった。けれども、店長はとっさにとあることに気づいて、それとわからないよう包丁をメイドさんの胸に差し、いわゆる殺人事件だと偽装したわけね」

プリキュア姿のまま推理を披露するのはなんだか滑稽な気がするが綿子が珍しく興味深いことを言っているのだから俺は感心しながら聴いていた。

「店の名簿や労働契約の書類がみつからないって二郎くん言ってたじゃない」

「ああ、そうだけど」

「あれはきっと最初の犠牲者が出てから店長がとっさに隠したんだろうね。店長はメイドさんを三人も殺害する意志はまったくなかった。けれども結果的に死んでしまった。自分が間接的に殺害したのだと気づかれないよう、さまざまな工夫を凝らしてれっきとした密室殺人事件にでっちあげ、名探偵にも協力を願うことでこの事件のミステリーマニア的神話性をアップさせ、真相の

密室殺人から遠ざけようとし向けたのよ」

「なんだかメタ的だなあ。よくわからないや」

「二郎くんいつもこれ以上に難しいことのたまっているじゃないの」

「まあそうかもしれないけど。それで、肝心の密室殺人トリックはなんなんだ。店長の意志にはなかったけど結果的に死んだってどういうことなんだ」

「それはね、過労死よ」

「はい？」

「究極の密室殺人トリック。メイドさんを酷使し、労働基準法を遙かに上回る残業を重ねて三人のメイドさんは自らメイド喫茶という密室の中で死んでいったの」

究極なのかどうかはわからないがなるほど過労死というのは思いつかなかった。

「それで、働かせ過ぎた結果死んだことが世間の明るみになったら店長としてもまずいから密室殺人にでっちあげて、店の名簿とかシフトとかを隠したのね」

「なるほどなー。どうして気づいたの」

「二郎くん、あんたはあんたが思ってる以上に疲れてるわよ。あんたの彼女を長年やってきたんだからそれくらいわかるよ。あの店でけっこう酷使されていたんだらうって。長年いたメンバーならなおさら、いつ死んでもおかしくない状況だったのよね」

青いひらひらのスカートを握りしめながら綿子は言った。綿子は本当に侮れない奴だ。

「今回の事件でメイドさんが一番死んで困ったのは店長だろうね、きっと。けれども、自分が直接的ではないにしろ殺したようなもんだから仕方ない。事件の詳細についてはお父さんにもう話したから、今頃一時釈放した店長を探しに行ってるはず」

「そうか。それなら一件落着だな。どうだい、たまには今夜」

「まあ、いいよ」

綿子はプリキュア姿のまま、俺たちは熱い夜を過ごした。

翌日、事件は思わぬ方向に展開していた。夕べのうちに釈放された店長は見つからず、翌朝例のメイド喫茶で今までと同じように密室で発見されたのである。店長は包丁を握りしめており、それが自らの胸元を貫いている。

ちょうど綿子から推理を聴いていたということもあり、警察は皆店長が良心の呵責に耐えかねて自殺したとばかり考えていた。事件解決の折りに俺はメイド喫茶を辞めようと思い、山吹るかに電話したところそんな状態になっていることを聴いたのである。俺はまっさきに現場へ急行した。

「お、これはこれは名探偵さんじゃないか。今回は役立たずだったようだな。全部自慢の娘が解決してくれたよ」

岩槻警部は勝ちほこったように嘯いた。まったく殺人現場の警察が取るような態度とは思えないが、その娘とは昨晚あんあんして今頃コス服のまま俺の家で寝ているとは死んでも言えない。

「結局、従業員を過労死するまでこき使って、いざ死んでしまってから慌てた店長の一人芝居だった、ってことだな」

「うーん、何か引っかかるのだけど」

「おまえはこの期に及んでうちの娘の名推理にケチをつけるのか。ろくでもないやつだな」

違和感の正体がわからなかったので俺は黙っていた。岩槻警部は今回の事件で娘が完全にお株を持っていったので、名探偵はショックを受けているんだろうとゲスなことを考えているに違いない。俺を見る目が優越感でみちみちていた。毎度ながら本人はなにもやっていないのに、ろくでもない警部である。

警察が去った後、メイド喫茶は通常通りの営業となった。店長亡きあと山吹るかが地事実上の店長となり、普段とまったく変わらぬ日が続いた。俺は事件も解決したし辞めようと思山吹るかに相談しようと思っていたのだが、朝にあんなことがあったせいかなかなか切り出せずすぐに始業モードになってしまい、しかたなくその日一日をハードにワーキングすることになった。

たっぷり疲れたのでたまにはいいだろうと思い、メイド喫茶のすぐ下にある男性用サウナで一汗流そうと立ち寄った。ラッキーなことになぜか財布の中には割引券がある。どこで手に入れたのかわからないけれども、500円くらい安くなった。

人工炭酸泉に浸かりながら俺は綿子の推理について思いを巡らせた。何が引っかかるのだろうか。過労死という俺すら思いつかなかった死因に戸惑いを感じているだけだろうか。

人工炭酸泉はちょっとした半露天風呂になっていて、ほとんど柵で仕切られていて外は見えないものの、屋根の近く上の方は柵が届いておらず空いた状態になっていた。上のメイド喫茶内厨房の窓から外に出て、壁に張り付いているパイプを伝い、うまく半露天風呂の屋根までたどり着けば、あとは誰も浴そうにいないのを確認して浴槽へ思いっきりダイブする。入るときのチェックはとくにないが、店を出る際に精算となるので入場していない人でもばれないだろう。

当初の予測通り、男が窓から脱出して下に侵入し、何食わぬ顔で出ていくという密室トリックは十分可能である。しかし、常連客でメイド喫茶の厨房まで熟知していた人は果たしているのだろうか。昨日も働いて、たしかに常連の客らしき人は何名か見かけたが、熱心に台所までチェックするような人はあたり前だがいなかった。

そう考えると、あのメイド喫茶で店長の他に犯行可能な人物は俺、ということになる。どーん

。

待てよ。

バラバラだった謎が一本の線で繋がった。やはり綿子の推理は間違いだったようである。

犯人は店長ではない。ましてや、メイドさんたちは過労死なんて変な死に方をしてないんだ、あれは誰かに殺害されたのである。

俺はさっと体をあがってサウナを出ると、再びメイド喫茶に戻り、山吹るかを電話で呼び出した。俺はメイド服に着替えると、戻ってきた山吹るかを出迎えた。

ガチャッと扉の開く音がした。俺はこの店で培ってきたメイドの精神を渾身込めながら言った

。

「お帰りなさいませ、メイド喫茶トロピカル連続殺人事件の真犯人さま」

明かりのない、ファンシーなBGMもないメイド喫茶の店内はまるで冷蔵庫の中奥深くにしまわれてしまったかのような静寂さに包まれていた。山吹るかはロングコートを握りしめつつ、俺を怪訝な表情で見下ろしていた。

「どういうことなのですか」

「綿子の推理、店長が間接的にメイドたちを過労死させたというのは間違いだったんだ。例の過労死密室殺人、これの被害者が一人というのならトリックは十分通用する。けれども、これは連続殺人事件だ。さすがにこの過労死トリックをまったく同じ条件で三件も連発させるというのは非常に難しい。いわばプロパビリティーの殺人にも近いからね」

「それなら、私はどうやってメイド三人を殺害してあの部屋から脱出したというんです？」

「それは至極簡単だ。殺害後、厨房の窓から外へ脱出、パイプを伝って下の男性サウナに侵入、そのまま客のフリをして脱出した」

「そんなことできるわけじゃないじゃないですか！」

「できるはずさ。山吹るか、そしてこのメイド喫茶の従業員全員がこのトリックを使って密室を脱出することができる。なぜなら、みんな俺と同じ性の人間だからね。山吹るか、その場で服を脱いでもらっていいかな？」

俺は勝ち誇った笑みを浮かべた。これで言い逃れはできまい。

観念したように山吹るかは俯いた。さすがにこの場で性器を切り取るような真似はできないだろう。

「はじめ、俺がこの事件の捜査にこういう形で乗り出したいと言ったとき、店長は俺が女装して接客するのをひどく嫌っていた。店長は純粋にふつうの女の子を集めてメイド喫茶を経営していたんだ。けれども山吹るか、君が店長のチェックをすり抜けて従業員となり、出世して大役を頼まれ、採用担当になってからは店長の思惑とは真逆の計画を進行させたってわけだ。君はこのメイド喫茶の従業員を女装男子で統一し、今までとはまったく異なる新しいタイプのメイド喫茶にしようとした」

「そうですよ。そのとおりですよ。新しい刺激を常に求める客層が来るこの秋葉原で、いままでどおり凡庸なメイド喫茶を経営しているだけじゃやっていけないんですよ！ 前の店長は人件費を削減し、従業員対し過度に労働を要求することでなんとかこの店を成り立たせていたけど、はっきり言ってそんなのナンセンスでした。私を含め、女装男子の採用をはじめてから、その不思議な魅力にとらわれて来店する人がぐっと増えたのです」

「そして最終的にはこの店の従業員全員を女装男子にしようとした。その計画を遂行する上で邪魔者となったのが山吹るかの入店より前から存在していたベテランの女性メイド4人、そして女装男子を嫌う店長。わざと勤務状況のわかる書類を隠し、店長に疑いのかかるような殺害方法で罪をなすりつけた上、店長を自殺にみせかけて殺害したというわけだ」

「どうして私の計画がわかったのですか？」

「殺されずに済んだ一人のメイドさんがいたんだ。もうやめちゃったけど、この間店に遊びに来ていた。五百川蒼子という子なんだけど、彼女はおそらくなんらかの形でこの店が女装男子ばかりになりつつあるという事実気がついたんだ。直接何かをみたのか、それとも女の勘なのか、それはわからないけれども、居心地の悪さを過剰労働のせいにして店を辞めていったわけだ。そ

の蒼子が俺のことを男性だと見抜いたんだよ。はじめは蒼子がマスコミの人間で、女装することで捜査する僕の正体を知っている人間だと思った。けれども、よく考えてみなくても僕の女装を見抜けるはずがないさ。完璧だからね。ましてや、蒼子のような一般人にばれるはずがない。そう考えると、蒼子がこの店の従業員の特性を知っていると考えた方が早いだろ？ 犯行に及んでいたのは山吹るかただ一人だけだったが、一度従業員全員の性別を疑ってみると事件のトリックも動機もすべて見えてきたんだよ。蒼子は俺のことを名探偵だと見抜いたわけじゃなく、ただたんに女装男子としてこの店にやってきた山吹るか採用組の一人だと勘違いしたわけだ。まあ、間違っていないけどね」

「よほど自分に自信があるんですね。あなたのような人間に、ここで働いて欲しいのです」

女性が女の子らしく振る舞おうとすると単なるぶりっ子になって興ざめすることがある。けれども、女装男子は自らの理想とする究極の女性性を自由に演じることができるのだ。ある意味、女の子よりも女の子らしい。

「山吹るかが男性であることを確信したのは財布に入っていた紙切れ一枚のおかげだった。最初に採用の話を持ってきたとき、前金としていくらか渡してくれただろう。あのとき、このメイド喫茶の下にある男性用サウナの割引券が入っていたんだ。店員に問い合わせたところ、この割引券は無料頒布しているわけではなく、来店した客に順次配っているものなので、そもそも女の子が持っているはずがないんだ。そんな割引券が俺の財布から出てきたわけで、君から前金をもらう以外他に財布を使うような場面はなかったから、これは間違いないと思ったんだ。きっと、脱出経路を予習するために一度入ってみて作戦を練ったわけだ」

「そんな、そんな人のあら探しをして楽しいですか？」

小声で山吹るかは言った。それは今にも泣き出しそうな女の子の仕草そのものだった。

「たしかにあなたは名探偵です。私は男性ですし、この店にいない女性メイド3人とわからずやの店長を殺害しました。けれども、あなたは事件の謎を解くことの方を快感としているのですか？ 私があなたを採用したのも、単にここの従業員としてこれ以上の人材はないと思ったからなんです。あなたは女装することに悦びを見だし、女性すら仰天する美貌を体現できる数少ない人材です。血で血を洗うような人殺しの後を追って薄汚い商売をするよりも、フリフリの衣装を着て女の子らしく振る舞って笑顔でいるメイド喫茶の商売の方が、あなたに向いていると思うんです。どうですか、私と一緒に理想のメイド喫茶づくりをしませんか？ ここを女装男子ファンの楽園にするんです」

「そうしたいのはやまやまだけどなあ」

「私はあなたの女装能力を高く評価しています。探偵なんて世間にくらでもいますけれども、あなたのように完璧に女装できる人材はうちのメイド喫茶に必要不可欠なんです。見た瞬間すぐに惚れましたよ」

初めはこの事件を解決してやるという意気込みしかなかった。謎解きのあとはだいたい岩槻のおっさんがやってきてそのまま犯人を連れ去ってしまうので、善悪なにも考えずに仕事も終わりを迎える。けれども、今は誰もいないメイド喫茶に二人つきりである。事件の謎を解いてからこのようなことを犯人から申し立てがあったのは初めての経験だ。

「名探偵さんに聴きますけど、殺意の中でもがき苦しみ、犯人と同じ思考回路を共有する職業がそんなに楽しいですか？ 事件を解決へ導いて平和を維持する仕事を全うする一方、もしもこの世から殺人事件が消えてなくなったら仕事もなくなって暮らせなくなるという葛藤を常に胸に抱いていますか？ そんな職業よりも、純粹に人を楽しませる職業に就いたほうが自分も相手も楽しいと思うんです。私が掲げたこの店の経営理念にぴったりな才能の持ち主なわけですから」

俺の心は揺らいでいた。君は犯人なんだからそんなことを言っている場合じゃないと的確に反論することができなかつた。大変な仕事に就きながらも、俺はここ数日間、自分の変身願望を叶えつつ、初めて人の笑顔にふれられるような仕事ができているのである。探偵なんかやっても人の憎しみや悲しみにしか触れることができない。それは山吹るかの言うとおりでたつた。

「店長があなたに事件の謎を解く依頼をしていたのは誤算でした。けれども、あなたのような人材は事件の邪魔になろうとも、店として切実に必要でした。これを見てみてください、お客様によるメイドさんの人気投票です。まだ働きだして間もないのに、相当上位まであがってきているでしょう？」

本当だ。3位である。本当に3位。こりゃあすげえやと自分でも感心してしまった。

「世間では店長がメイドたちを過労死させ、そこに罪悪感を抱いてしまい自殺したという通説がまかり通っています。このまま探偵さんが誰にも言わなければ隠し通せますよ」

確かにそうだ。俺が黙っていればいいだけの話だ。ここには山吹るかと俺以外誰もいないし、まだこの真相は誰にも話していない。

俺は不思議な高揚感にとらわれていた。胸が熱くなっていたのである。さまざまな事件の現場に出くわすという疫病神みたいな経験を何度も積んできて得たものは何だろうか。事件を起こさなければどうしようもない不幸な人間を貶めることで、謎が解けるひとときの快樂だけを求めて名声を得てきたのではないか。それよりも尊い何かをたつた今見つけることができたのではなからうか。

「わかつた。山吹るか、今回の件は内……」俺が言いかけたとたん、背後から物音がして気がついたら後頭部に謎の棒が直撃していた。鈍痛が走る。

「あんた馬鹿じゃないの！」

そこにいたのはキュアマリンの服に身を包んだ岩槻綿子だつた。頭に当たつたのも彼女が投げたプリキュアの棒であろう。棒というかなんというか。

「それでも名探偵なんですか？！ そいつは犯人よ！ いかなる高邁な思想があろうとも殺人だけは絶対に許せないんだから。死んじやつた女性のメイドさん3人には全く罪がないんでしょ？」

ごもつともです、はい。

「二人の会話はしっかり録音させてもらいましたからね、音声データは自動的に父さんのところへ届いてるわ、まもなく警察がここに到着するからね。堪忍しなさい、ほら二郎くんもしっかりして、こんな犯人に唆されてこんな店続けたら気が狂っちゃうでしょ」

「綿子、どうしてここがわかつたんだ」

「いやさあ、昨日のお楽しみのあと夕方まで爆睡しちゃつたみたいでさ、目覚めると二郎くんいなくなつて、しばらく二郎くんの部屋の片隅でぼけえつとしていたんだけど、よく考えたら

もうメイド喫茶辞めてるはずだしここにいないのはおかしい、ひよっとしたら私とずっこんばっこんした後たった一日で山吹るかに鞍替えしてるんじゃないかと疑心暗鬼になって、二郎さんにこっそりつけていたGPS見たら案の定山吹るかと一緒にいるじゃない。怒り心頭に発して家を飛び出してここまでぶっ飛んできて二人の会話聴いていたっていうわけよ」

「それじゃあ、その格好のまま俺の家からここまで町中を走ってきたってわけか？」

「えっ」

綿子は昨日のプリキュア服のままであることをすっかり忘れていたらしく、瞬く間に頬を紅潮させた。

「二郎くん、そんなに落ち込まないでよ」

「落ち込んでないさ。ついさっきまで綿子が秋葉原のど真ん中を血眼でキュアマリンのコスチュームのまま走っていた姿がアキバブログに掲載されていて爆笑していたところだよ。あっはっはー」

正直なことを言うと俺は落ち込んでいた。

あのあと、すぐに綿子の父親である岩槻警部が到着し、山吹るかはそのまま連行されていった。綿子だけでなく俺もメイド服姿であったが岩槻警部は別段気にしていなかったようだ。もう何度も見慣れているせいだろう。それよりも娘の青いひらひら衣装のことをひたすら心配していた。綿子は顔を真っ赤にさせながら穴があつたら入りたいと俺をポカスカ殴りながら騒いでいた。

事件の夜が空けて平和が戻ってきた俺の部屋である。綿子は体から魂の抜けきった俺を必死に励まそうとしていた。俺は昨日山吹るかに言われた探偵の宿命を反芻しながら憂鬱になっていたのである。もっとも、綿子の方が正論であり、彼女のしたことを咎めることはできない。けれども、俺がなんとかあのメイド喫茶に残る方法はなかったものか。

メイド喫茶トロピカルは相次ぐ不祥事を経て閉店に追い込まれた。店の実権を握っていた人物が二人もいなくなったので仕方あるまい。

「そもそも、私の前以外で女装を披露しようとしたから罰が当たったのよ。二郎くんの女装姿はこの私がいくらでも見てあげるからさ、ね？」

「そうねえ……」

何か女装しながら捜査できそうな事件はないかと新聞紙を繰ってみたが、名探偵さえ必要なさそうなくならない事件ばかりが紙面を躍らせていた。

その時、携帯電話に綿子の父親から電話がかかってきた。

「二郎君！ 事件だ、葺不合神社で神主が殺害される事件が発生した。今すぐ現場に急行してほしい」

「わかりました！」

携帯電話を切って俺は綿子に言った。

「よし、事件発生だ！ 今すぐ俺と一緒に巫女服に着替えて出動するんだ！」

「なんなのよそれ！ 女装関係ないし、完全に変な人じゃない！」

「いいから早く！ あの段ボールにたしか巫女服が……」

次の瞬間、ガンダムと書かれた段ボールが頭にクリティカルヒットして俺はぶっ倒れた。

「名探偵なんだからたまには普通に捜査しなさいよ！ しっかり仕事とプライベートは区別するの！」

いつから綿子は俺のマネージャーになったのか知らないが、俺はしょぼしょぼと彼女のあとを着いていくことにした。このあとまた俺は難事件に巻き込まれることとなるが、それはまた別の話である。